

## 東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1620">http://hdl.handle.net/2297/1620</a>

# 東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について

松永篤知

## 1. はじめに

世界各地の先史時代、特に新石器時代に相当する時期の土器外底面には、編み物や織物、木の葉などの圧痕が残されていることがしばしばある。日本では、こうした圧痕は縄文時代中期から後期にかけて多く見られ、圧痕原体の種類によって「網代圧痕」・「スダレ状圧痕」・「編布圧痕」・「木葉痕」などと呼び分けられている。隣国の中国でも、仰韶文化や紅山文化、大汶口文化などの土器に同様の圧痕が多く見られ、「蓆紋」・「編織紋」・「布紋」などの名称で呼ばれている。

これらは一般的に、土器製作時に使用されていた敷物の痕跡として理解されており、日本ではE.S.モース氏によって早くから紹介されている(モース1879)。土器を成形する際に、何らかの敷物を敷けば、土器底部と作業台の密着を防ぐことができる。また、敷物自体を回転具とすれば、土器を回しながら作業することも可能になる。そのため、当時の土器製作者は、編み物や織物、木の葉などを土器の下に敷いたというのである(荒木1971ほか)。その後、磨くなどして調整をおこなわない限り、土器の底部にはそのまま敷物の痕跡が残されることになる。

この種の圧痕を、「土器製作時に使用された敷物が残した圧痕」という意味を込めて、仮に「敷物圧痕(mat impression)」と呼ぶことにしよう。これら「敷物圧痕」は、土器製作上の一過程における産物であると同時に、土器製作技術以外の情報をも多く有している。その原体である敷物の素材は、当時の自然環境の影響を少なからず受けているし、また多くの敷物は編織物であるから、当時の編織技術も大きく関わっている。つまり、実物としては遺存しにくい有機質遺物の間接的な資料としても重要な存在なのである。近年は、低湿地遺跡の発掘調査もたびたびおこなわれるようになり、編み物や植物遺体の実物が出土する例もかなり増えてきている。しかし、それでも資料の数は十分に多いとはいえ、地域差や時期差の詳細を明らかにすることは難しい。もちろん、この種の遺物の素材などについては実物資料に勝るものはないが、編み物の編み方や分布などの特徴を見るには、むしろ数量的に充実している「敷物圧痕」の方が有効な資料となり得るのである。

本稿では、こうした「敷物圧痕」を分析するための基礎的研究として、東アジア全体を対象とした分類を試みる。従来、原体の種類によって大まかに区別されてきた各種圧痕を、「敷物圧痕」という一つの枠組みの中で改めて捉え直してみたい。土器製作技術や編織技術などの問題を具体的に検討するためにも、第一に資料の分類法を再整理する必要がある。

## 2. 研究史と問題点

東アジアの中でも、「敷物圧痕」の資料(報告例)が最も多く、研究も特に進んでいるのは、他ならぬ日本である。そこで「敷物圧痕」の分類法を再整理する前に、日本の研究史を概観し、その主な成果と問題点をまとめておきたい。東アジア全体を分析対象とするための分類案を作成するにあたって、何かしらのヒントになるはずである。

日本では、E.S.モース氏による東京都・大森貝塚の発掘報告が「敷物圧痕」の初出である(モース1879)。今でいうところの網代圧痕(経条・緯条が縦・横(・斜め)に交差するもの)が数点図示され、敷物の痕跡として紹介されている。圧痕についての詳細な分析・考察はおこなわれなかったが、この時すでに「底部の圧痕=敷物の痕跡」という見解が出されていたことは重要である。

1893年、坪井正五郎氏は「西ヶ原貝塚探究報告 其四」の中で、土器底部の圧痕を「無紋」・「編み物押し形」・「木の葉押し形」・「木の葉編み物混交押し形」・「不詳」の5種類に分類した(坪井1893)。特に編み物押し形(網代圧痕)については、編み方によってさらなる細分をおこなっている。事実上、これが「敷物圧痕」に関する日本最初の考察例である。その後も坪井氏は、網代圧痕の研究を推し進め、その編み方を「簡単」・「平等筋違編」・「変り編」・「雑り編」・「小紋編み出し」・「模様編み出し」・「三方編み」の7種類に大別している(坪井1899)。このうち平等筋違編と変り編については、緯条の「超え」・「潜り」・「送り」による細分が加えられているが、これは緯条が経条を何本超え、何本潜り、経条何本分横方向に送って(ずれて)いくかによって編み方を分類するというものである(図1-1)。この分類法は、実際は平等筋違編・変り編以外の編み方にも適用でき、現在も網代圧痕分類の基礎として広く用いられている。この分類に基づいた分析の結果、2本超え2本潜り1本送りの編み方が最も広範に分布することが指摘されている。以後、「敷物圧痕」の研究は、網代圧痕の編み方を中心におこなわれることになった。編み物全般を扱った論考の中でも、網代圧痕の編み方は必ず論じられている。

杉山寿栄男氏は、考古資料・民俗(民族)資料問わず繊維製品を収集しているが、網代圧痕についても詳細な観察をおこなっている(杉山1928, 1942)。杉山氏は、上述の坪井氏による分類法ではなく、民俗資料の概念に基づいて「網代編」・「籠目編」・「箆編」・「透編」などの表現を用いた。さらに細かくは「柘形網代」や「二重網代」といった名称を用いたり、超え・潜りを「何本飛ばし」という形で表現したりしている。杉

山氏は、編み方のみならず素材にも注目し、各資料について竹や蔓などの使用を推定している。特に、竹の多い関東地方と竹の少ない東北地方との違いを指摘している点は重要である(杉山1942)。

小林行雄氏は、縄文時代から奈良時代にかけての編み物全般についてまとめているが、何よりも先に縄文土器底部の網代圧痕について論じている(小林1964)。小林氏は、坪井氏や杉山氏の研究をふまえた上で、2本超え2本潜り1本送りが縄文時代における網代の最も基本的な編み方であるとした。この2本超え2本潜り1本送りをはじめとした綾編み(坪井氏のいう筋違編み)は、縄文時代から奈良時代まで一貫して、圧痕資料・実物資料ともに、1本超え1本潜り1本送り(坪井氏のいう簡単網代編み)よりも多用されるという。その理由として、綾編みは条材の屈曲が小さく、柔軟ではない素材を用いた場合でも並行する各条を密接させることができる点を挙げている。

網代圧痕の編み方・利用法・素材などについて、土器製作との関係から総合的な研究をおこなったのは荒木ヨシ氏である(荒木1968・1970・1971)。荒木氏は、(1)土器の磨り消し技法が発達した時期に網代圧痕も磨り消されること、(2)縄文時代後期に発達した模様編みは工芸的水準が高く二次利用の可能性があること、(3)網代編みの敷物と土器底部は胎土がかなり乾燥するまで密着していたこと、(4)網代編みの大きさは竹(比較的細いもの)の節一杯くらいであったこと、(5)同一の敷物の利用頻度はせいぜい2~3回程度であること、(6)網代の編み方には地域差・時期差が認められることなど、土器製作作用の網代編み敷物の実態をさまざまな面から明らかにした。また網代の編み方については、坪井氏のカテゴリ法を基にして、46の型式(スダレ状圧痕も含む)に細かく分けている。荒木氏はその後も「敷物圧痕」の研究を続け、近年も全国的な集成に基づく論考を発表している(荒木1995)。

荒木氏の三部作が完結した1971年、安孫子昭二氏は、東京都・平尾No.9遺跡の発掘報告の中で、2本超え2本潜り1本送りが西日本の基本的編み方であり、2本超え1本潜り1本送りが東日本の基本的編み方であるという仮説を立てた(安孫子1971)。荒木氏の研究をふまえた上で出されたこの仮説は、現在も広く受け入れられている。この時点において東日本・西日本の境界は、静岡県・蜷塚遺跡の付近が想定されている。

遺跡出土のカゴ類全般について研究をおこなった植松なおみ氏は、間接的な資料として網代圧痕にも注目し、安孫子氏の仮説を補強している(植松1980)。福島県から京都府にかけての12遺跡の網代圧痕を比較することにより、東西の違いが改めて確認された。ただし東西の境界については、必ずしも蜷塚遺跡周辺でまっすぐ分かれるわけではなく、再検討の必要があることも指摘されている。また植松氏は、鳥取県・桂見遺跡の資料を基にして網代圧痕の分析をおこなっており、1本超え1本潜り1本送りの編み方で丸みを帯びた圧痕(東北型網代圧痕)が、東北地方北部を中心とした多雪地帯に分布することを明らかにし

た(植松1981)。この種の圧痕の素材原体については、後に渡辺誠氏がマタタビの可能性が高いことを指摘している(渡辺1996)。

小笠原好彦氏は、『縄文文化の研究』第7巻において縄文時代の編織物についてまとめているが、やはり最初に扱っているのは網代圧痕である(小笠原1983)。実物資料とも比較しながら、早期から時期を追って網代圧痕の編み方が整理されている。小笠原氏は、2本超え2本潜り1本送りや2本超え1本潜り1本送りをはじめとした綾編みが各地域で共通する一方で、ごく小さな地域・時期に限られる編み方にも目を向けている。一般的な編み方を扱った論考が多い中、これも重要な視点である。

分析の対象を特定の地域に限定した研究としては、岡元満子氏による九州地方南部の「敷物圧痕」研究が好例である(岡元1986)。岡元氏は、鹿児島県および宮崎県南部における圧痕資料を集成し、網代圧痕(スダレ状圧痕も含む)の成立過程について検討した。その結果、縄文時代中期の阿高式土器に代表される「鯨底」(鯨の椎骨椎端板を土器製作作用の敷物としたもの)が、網代圧痕を有する底部の基になったという仮説が立てられている。阿高式の交流圏が衰退・縮小するにつれて鯨の骨が入手困難になり、その代用品として網代編みの敷物が使われるようになったという解釈である。また、網代の編み方についても検討されており、平編み(1本超え1本潜り1本送り)が最も多く見られることや、単純な綾編みよりも複雑な綾編みが多いことなどが指摘されている。

網代圧痕の編み方ではなく、土器製作技術との関係に特化した研究としては、秋田かな子氏の論考がある(秋田1990)。秋田氏は、土器外底面の中央部と周辺部で網代圧痕の編み方が異方向になっている二重圧痕の例に焦点を絞り、「中央詰め込み技法」の使用を推定している。まず、編み物の上に粘土紐を環状に置く(第1粘土帯)。その後、同一あるいは別の編み物の上に新たに粘土塊を押圧して円板状にする(第2粘土帯)。それから第1粘土帯の内側に、第2粘土帯を圧痕がついている側を下向きにして詰め込めば、中央部と周辺部で異方向の編み方を持つ圧痕ができるというのである。秋田氏の研究は、編み方に偏重しがちな網代圧痕研究の中で、新たな視点を示している。

以上のように、網代圧痕を主眼に置いた研究が多く見られるが、土器製作時に残された「敷物圧痕」は、網代圧痕だけではない。それ以外のスダレ状圧痕・編布圧痕・カゴ底圧痕・葉脈圧痕などについても、網代圧痕と一緒に取り上げられることがあるし(杉山1942、小林1964、荒木1970・1971・1995、植松1980、小笠原1983ほか)、それぞれを専門的に扱った論考もいくつかある。

渡辺誠氏は、民俗考古学的な視点から各種編み物の研究をおこなっているが、特にスダレ状圧痕と編布圧痕に関して、多くの論考を発表している(渡辺1976・1985・1992・1995)。両者とも、経条が2本単位で緯条に絡めるように編んでいくもじり編み(図2)による敷物の圧痕であり、緯条の間隔の粗密によって

区別できることが明らかにされている。その要因は用いられる素材にあり、経条・緯条ともに糸材を用いる編布圧痕の方が密度が高い。編布圧痕は織布出現以前の布資料としても貴重であり、渡辺氏の研究の主眼も編布の起源と変遷に重点が置かれている。日本の編布の起源地として、中国大陸を想定している点も重要である。

渡辺氏同様、民俗考古学を研究手法とする名久井文明氏は、遺跡から出土した編み物資料を民俗資料と比較する中で、スタレ状圧痕を取り上げている(名久井1998)。名久井氏は、網代編みを「網代組み」、もじり編みを「縄目編み」と呼ぶが、後者の例として青森県・白座遺跡のスタレ状圧痕に着目した。詳細な圧痕観察の結果、いずれの資料にも共通する特徴が抽出され、平面を形成する技術としてのもじり編みの広域性に結びつけられている。各種編み物技術が、かなりの広域性・継続性を持っていることは、名久井氏が指摘するように考古資料と民俗資料の共通性から明白である。また、観察資料の中に複数の圧痕が残される例が認められることを根拠として、底部に残される編み物の圧痕が土器製作過程における偶然の産物ではなく、明確な意図をもって土器に残された一種の施文である可能性も指摘されている。

編布圧痕については、生活文化史を専門分野とする尾関清子氏によっても、詳細な研究がなされている(尾関1996)。尾関氏は綿密な観察を通して、編布圧痕の中にも編み目の単純な「基礎編布」と編み目の複雑な「応用編布」の別があることや、返し縫いのような刺繍を施したと思われる資料が存在することなどを明らかにした。また、さまざまな編布の製作実験もおこなっており、その結果、一般的に考えられている編み台<sup>1)</sup>(編布法)以外にも、弓状の編み具(横編法)などを用いた可能性が指摘されている。生活学的な視点を出発点としたこれらの研究成果は、考古資料分析のさらなる可能性を示すものとして注目されよう。

もじり編みによるもう一つの「敷物圧痕」としてカゴ底圧痕が挙げられるが、これについては山本直人氏の研究がある(山本1989)。山本氏は、カゴ類の存在を明確に裏付ける資料としてカゴ底圧痕を重視し、石川県内8遺跡の例を収集した。さらに圧痕資料のみならず県内の実物資料や民俗事例も総合して、北陸地方におけるマタタビおよびヒノキ製カゴ類の発達を論じている。マタタビやヒノキがカゴ類の素材に利用される要因として、時代的要因のほか、湿気の多い多雪地帯という気候条件を挙げている点は大変興味深い。

印東道子氏は、木の葉を土器底部に敷いたために残った葉脈の圧痕、いわゆる「木葉底」(笹葉の圧痕も含む)の研究をおこなった(印東1975)。縄文時代から古墳時代にかけての資料を総括的に扱い、圧痕が残される要因についてさまざまな可能性を検討している。もちろん土器製作時の敷物もその一つに挙げられているが、装飾や祭祀を目的とした可能性も指摘されている。また、この種の圧痕と網代圧痕との間に何らかの関係が

あることも指摘されているが、その詳細については明らかにされていない。

北海道の縄文時代早期のみに認められるホタテ貝圧痕については、1956年に藤本英夫氏によってその存在が初めて確認されている(藤本1956)。これは、ホタテ貝の貝殻を土器底部に敷いたことにより、貝殻背面の肋筋痕が残った資料である。その後、地域・時期ともに狭い範囲に限られるこの「敷物圧痕」は、早期北海道平底土器の指標として重要な特徴の一つになっている。(後藤1982)。

一方、九州地方の縄文時代中期から後期にかけて認められる鯨の椎骨椎端板の圧痕については、三島格氏の研究がある(三島1961)。これは、阿高式土器とその系列土器に見られる圧痕であり、一般に「鯨底」と呼ばれている。鯨の椎端板を土器底部に敷くことにより、キクメイシ状・アバタ状の痕跡が残るのである。この種の圧痕原体が鯨の椎端板であることにいち早く気づき、土器製作の敷物であることを指摘した三島氏の視点には驚かされる。近年では、金田一精氏が九州全域約60遺跡の資料を収集しており、当時の捕鯨との関係や精神文化における性格についても合わせて検討すべきであることを主張している(金田1998)。また、この椎端板の鯨種は現時点では特定されていないが、平口哲夫氏がコクジラのものである可能性を指摘している(平口2003)。

以上が、日本における「敷物圧痕」研究の主な成果であるが、改めて確認されるのは、網代圧痕を中心として特定の圧痕のみを扱った研究が多いことである。確かに、原体の種類によって「敷物圧痕」を区別すること自体は当然のことであるし、各種圧痕の個別研究によって多くの成果があげられていることも紛れもない事実である。しかし、それにしても各種圧痕の相互関係や全体的背景について論じた例は少ないと言わざるを得ない。もちろん、個々の発掘報告の中で一遺跡ないし周辺の敷物圧痕における各種圧痕の数量比が検討されることはしばしばあるし、県単位の比較的広範な地域を対象とした研究例もないわけではない(川端1983、長沢1986・1988、篠原2001ほか)。しかし、数量データや簡単な観察所見を提示することとどまるケースが多く、日本全体、東アジア全体という視点から「敷物圧痕」を総合的に捉えようとした研究は、皆無に等しいのが現状なのである。

また、分析対象とする地域を東アジアに広げた場合、従来の日本の「敷物圧痕」概念と他国のそれとの対応関係が問題になってくる。例えば中国では、日本とは異なった分類表現が用いられ、日本には見られない種類の圧痕が存在したりするのである。特に、「一経一緯人字紋(形)」・「三経三緯人字紋」のような網代編み分類(図1-2)は、一見すると坪井氏による分類法に似ているが、数値で表しているものが違うという点に注意しなければならない。中国の分類では、網代の紋様を構成する経条・緯条がそれぞれ何本1組になっているかを数値で示すのであり、経条・緯条の交差構造を数値化する日本とは捉え方が

全く異なるのである。

それでは、東アジア先史土器の「敷物圧痕」を総括的に分析するには、どのような分類を用意すればよいだろうか。この種の研究が最も進んでいるのは日本なのだから、その成果は最大限生かされるべきである。日本において別個に扱われてきた各種圧痕は、研究例としては少ないとはいえ、そのまま比較対象とするケースもあることを考えると、他国にしか存在しない圧痕を加えた上で、大分類とするのが基本的によいだろう。それを必要に応じて、編み方や素材などの諸特徴により細分し、小分類とする。編織物の圧痕なら編み方や素材が、植物の葉の圧痕なら葉脈の違いが、判断の基準となるはずである。このような分類ならば、それほど難解ではないし、先行研究とも矛盾することなく、汎東アジア的な圧痕分類として充分活用することができるであろう。

### 3、分類の方法と基準

それでは、具体的な分類案を提示することにしよう。本稿では、東アジア先史土器の「敷物圧痕」をA~Hの8種類に大別し、それぞれを必要に応じて細分することにした(図3)<sup>2)</sup>。これは上述したように、日本の圧痕概念を基本としているが、東アジア全体に対応するために変更した点や追加した点も多い。その詳細を以下に示す。

#### (I) 編織物圧痕

「敷物圧痕」のうち、圧痕原体が編織物であるもの。用いられる編織技法によって、A類：網代圧痕、B類：もじり編み圧痕、C類：織物圧痕、D類：巻き上げ圧痕の4種類に大別できる。

##### A. 網代圧痕

網代編み (twill-plaitingほか)<sup>3)</sup>による敷物の圧痕である。条材を縦・横・斜めに交差させたもの。「敷物圧痕」の中で最もヴァリエーションに富み、必要に応じて編み方分類(超え・潜り・送り)と素材分類(a~e)を組み合わせることにした。例えば「2本超え2本潜り1本送り」で「経条・緯条に扁平で太い材を用いるもの」は「A-2・2・1a類」と表し、特に編み方のみで表現するときは「A-2・2・1類」、素材のみで表現するときは「a類」または「Aa類」とする。

・編み方による分類 従来の坪井分類(坪井1899)を基本とし、条材の交差の仕方を数値で表す<sup>4)</sup>。網代の編み方については民俗学的な表現なども可能であるが、数値の方が客観的で分かりやすく、先行研究の多くも坪井分類に基づいているため、こちらの表現を採用した。非常に多種多様であり、主なもののみ以下に挙げる。

- 2・2・1: 2本超え2本潜り1本送り(図5-1~3)。
- 2・2・1×χ: 2本超え2本潜り1本送りで、経条・緯条の片方ないし両方(図5-4)を2本以上1組にするもの<sup>5)</sup>。
- 2・2・1/2: 2本超え2本潜りで、1本送りと2本送りを繰り返すもの(図5-5・6)。
- 1・1・1: 1本超え1本潜り1本送り(図5-7~9)。

1・1・1×χ: 1本超え1本潜り1本送りで、経条・緯条の片方(図5-10)ないし両方(図5-11)を2本以上1組にするもの。

2・1・1: 2本超え1本潜り1本送り(図5-13・14)および1本超え2本潜り1本送り(図5-12)<sup>6)</sup>。

3・3・1: 3本超え3本潜り1本送り(図5-15)。

3・3・1×χ: 3本超え3本潜り1本送りで、経条・緯条の片方ないし両方(図5-16)を2本以上1組にするもの。

3・2・1: 3本超え2本潜り1本送り(図5-17)。

3・2・2: 3本超え2本潜り2本送り(図5-18)および2本超え3本潜り2本送り(図5-19)。

3・2/3・4・5: 3本超え2本潜りと3本超え4本潜りを繰り返し、5本送るもの(図6-1)。中国でいう「二経二緯人字紋」で、2本超え2本潜り1本送りの両条2本組(図5-4)に酷似するが別種である。

4・2・3: 4本超え2本潜り3本送り(図6-2)および2本超え4本潜り3本送り(図6-3)。

5・2・3: 5本超え2本潜り3本送り(図6-4)。

a・b・c×4<sup>+</sup>: 超え・潜り・送りは一定しないが、経条・緯条

ともに4本以上を1組とするもの(図6-5)。中国でいう「多経多緯式」の一種。

三方: 三方編み。3方向の条が交差するもの(図6-6)。

模様: 模様編み<sup>7)</sup>。意図的に複雑な模様を編み出しているもの。山形綾紋や之字紋(図6-7)などがある。

・素材による分類 あくまで圧痕から想定できる範囲の形体的分類であるが、以下の5種類に大別することができる。また、それぞれ1.硬質材(樹皮・竹など)と2.軟質材(蔓・草など)の区別があり、どちらか特定できる場合は「a<sup>1</sup>類(形体はa類で硬質材を用いるもの)」や「b<sup>2</sup>類(形体はb類で軟質材を用いるもの)」のように表記する(図4)<sup>8)</sup>。

a: 経条・緯条に扁平で太い材<sup>9)</sup>を用いるもの(図5-1・7・15・17、図6-3・4・6)。

b: 経条に円柱状の材、緯条に扁平で太い材を用いるもの(図5-2・5・8・12・18・19、図6-7)。

c: 経条・緯条に太い材を用い、片方ないし両方の条が丸みを帯びるもの(図5-3・6・9・10、図6-(1)・2)。

d: 経条・緯条に細い材を用い、片方ないし両方の条が丸みを帯びるもの(図5-4・11・13・16、図6-(1))。

e: 経条・緯条に扁平で細い材を用いるもの(図5-14、図6-5)。

##### B. もじり編み圧痕

もじり編み (twining) による敷物の圧痕である。経条が2本単位で、緯条に絡めるように編んだもの。素材や形態の違いによって、以下の3種類に分類できる。

- 1: スダレ状圧痕(図6-8)。棒状ないし束状の植物素材(蔓材・草材など)に、軟質な別の条(蔓材・糸材など)を絡め編んだもの。編布圧痕・カゴ底圧痕以外のもじり編み圧痕

は、正確には「スダレ状」・「ムシロ状」など細分できるが、今回は全て「B-1類＝スダレ状圧痕」として一括することにした<sup>10)</sup>。

- 2: 編布圧痕 (図6-9)。経条・緯条に糸材を用いるもの。
- 3: カゴ底圧痕 (図6-10)。放射状に広がる条材に、別の条を絡め編んだもの。素材はB-1類と変わらないが、確実にカゴの底部であることが分かるものを本類とした。

#### C. 織物圧痕

織機によって織られた布を敷物としたものの圧痕である (図6-11)。経糸・緯糸が縦・横に交差して、網代編みと同様の構造を呈する。いずれも平織 (plain weave)、すなわち網代編みでいうところの1本超え1本潜り1本送りである。中には経糸なし緯糸のどちらか一方しか見えない畝織状のものも含まれるが、構造的な違いはなく、織り方による分類はおこなわない<sup>11)</sup>。

#### D. 巻き上げ圧痕

巻き上げ法 (coiling) による敷物の圧痕である。螺旋状の芯材を、巻き材によって巻き上げてあるもの。素材の違いによって、以下の2種類に分類できる。

- 1: 細い芯材を極細の巻き材で巻き上げるもの (図6-12)。
- 2: 円柱状の芯材を扁平な材で巻き上げるもの (図6-13)<sup>12)</sup>。

#### (II) 自然物圧痕

「敷物圧痕」のうち、圧痕原体が特別な加工を施さない自然物であるもの。原体の種類によって、E類: 葉脈圧痕、F類: ホタテ貝圧痕、G類: 鯨椎端板圧痕の3種類に大別できる。

#### E. 葉脈圧痕

植物の葉を敷物としたものの圧痕である。葉脈の違いによって、以下の2種類に分類できる。

- 1: 網状葉脈圧痕 (図6-14)。主にカシワやホオノキなど広葉樹の葉を敷いたもの。いわゆる「木葉底」に相当するが、稀な例としてフキなど草の葉も含む。
- 2: 平行葉脈圧痕 (図6-15)。チマキザサなど笹類の葉を重ねて敷いたもの。

#### F. ホタテ貝圧痕 (図6-16)

ホタテ貝の貝殻を敷物としたものの圧痕である。貝殻背面による放射状の肋節痕が残される。

#### G. 鯨椎端板圧痕 (図6-17)

鯨の椎骨椎端板を敷物としたものの圧痕である。いわゆる「鯨底」であり、椎端板の凹凸によるアバタ状の痕跡が残される。

#### (III) その他

「敷物圧痕」のうち、圧痕原体が編織物でも自然物でもないもの。現時点では、H類として設定した1種類があるのみである。

#### H. その他 (図6-18)

中央を走る十字と、無数の凹凸によって構成される圧痕である<sup>13)</sup>。中国新石器時代中期・仰韶文化の遺跡で特別な敷物の圧痕として報告例がある。

これら以外に、繊維状の圧痕や粒状の圧痕が底部に残されている場合もあるが、敷物としての役割を果たしたか否かは不明である。従って、今回の分類案からは除外した。また九州地方の縄文時代晩期に特徴的に見られる「組織痕土器」についても、土器の型取り技法に関わる圧痕であり (大脇1961、鏡山1972、渡辺1991)、本稿でいう「敷物圧痕」とは性格を異にするため分類案から除外した。

#### 4. 「敷物圧痕」の分布状況

筆者の分類案については以上の通りであるが、これに基づいて東アジア先史土器の「敷物圧痕」を捉えたと、一体どのようになるだろうか。本稿では具体的な分析はおこなわないが、新石器段階を中心とした東アジアにおける「敷物圧痕」の分布状況を、ひとまず簡単に見ておきたい。

東アジア全体を通じて最も普遍的な「敷物圧痕」は、A類の網代圧痕である。この種の圧痕は、「敷物圧痕」が確認できる地域・時期<sup>14)</sup>には必ずと言ってよいほど存在する。中でもA-2・2・1類が最もよく見られ、それに次いでA-1・1・1類が多い。

その一方で、特定の地域・時期に卓越・分布する「敷物圧痕」も存在する。日本では、北海道東部の縄文時代早期に見られるF類が最も古い地域・時期限定の「敷物圧痕」であるが、資料が最も多くなる中期から後期にかけては、各地方に独特の圧痕が確認できる。

東北地方や北陸地方では、A-1・1・1c<sup>2</sup>類 (いわゆる東北型網代圧痕、特に東北地方北部) やB-1類 (特に中期前半)、E-2類などが卓越する。一方、関東地方をはじめとした東日本では、後期前半をピークとして、A-2・1・1d<sup>1</sup>・e<sup>1</sup>類が圧倒的多数を占める。また九州地方では、G類およびA-1・1・1b<sup>2</sup>類 (特に南部の後期前半) が、特徴的に分布する。

さらに時代は下って弥生時代になると、「敷物圧痕」の主流はC類の織物圧痕へと移行し、それにE-1類が加わる形が典型となっていくようである。

中国では、新石器時代全時期を通じて、A類の素材にはっきりとした南北差が見取れる。華北地方以北ではb<sup>2</sup>類が主流となり、以南ではa<sup>1</sup>類が主流となるのである。また、新石器時代中期の仰韶文化や同後期の大汶口文化・竜山文化では、日本よりもはるかに早い時期にC類が卓越する。加えて、D類・H類も、資料数はきわめて少ないものの中国に固有の圧痕として注目される。

このように、東アジア先史土器の「敷物圧痕」は、地域・時間問わず共通の特徴を持つと同時に、特定の地域・時期に固有の特徴も多く持っているのである。今回の分類案に基づいて資料を見ると、それがよく分かる。その背景には、当時の土器製作技術や編織技術などが関わっていると思われるが、詳しくは別の機会に述べることにしたい<sup>15)</sup>。

#### 5. おわりに

今回提示した分類案は、あくまでも試案である。現段階では

不十分な点も多々あることと思う。先行研究をふまえると、どうしても網代圧痕のみが細かくなってしまったが、他種の圧痕をさらに細分することも可能であろうし、逆に網代圧痕の分類をより簡単にした方がよい場合もあり得るだろう。

東アジア的視点からの「敷物圧痕」研究は、まだ始まったばかりである。今後は、圧痕原体となった敷物や当時の文化的背景、周辺の古環境などに関する知識をいっそう深め、より実態に即した分類基準を模索していく必要がある。

本稿は、2003年7月に金沢大学大学院文学研究科に提出した修士論文「東アジア先史土器の「敷物圧痕」について」のうち、研究史および分類案に関する部分に加筆・訂正を加えて再構成したものである。

論文完成に至るまでに、多くの方々からご指導・ご助言をいただいたが、特に分類案の整理に関しては、指導教官である中村慎一先生のご指導によるところが大きい。この場を借りて、先生に尊敬と感謝の意を表します。

## 註

- 1) 編布の作成年具については、民俗事例に見る越後アングンの編み機に近いものが想定されている(伊東1966・小笠原1970ほか)。経糸を掛けるために刻みを入れた横木(ケタ)と、その両端を支える脚(アミアシ)を組み合わせたものが本体で、それに経糸を巻きつけた編み錘(コモツチ)がセットとなる。編み錘に巻きつけた経糸を横木の刻みにつり下げ、さらに緯糸を横木に沿って乗せた後、編み錘を前後させて絡め編んでいくのである。これは、スタグレや俵の編み機と全く同じ構造である。
- 2) 中国の資料のみを対象とした分類試案は別稿において提示したが(松永2003)、今回日本の資料を合わせて再構成した。
- 3) 通常、編み物用語の「網代編み」は、扁平なへぎ材などを交差させて綾(斜紋)を形成するものを指し、英語の *twill-plaiting* に相当する言葉である。しかし日本考古学では、より広い意味を持ち、単純な交差構造から成る編み物全てを指す語として用いられることが多い。すなわち、平編み(四ツ目編み)、ザル編み、カゴ編み(六ツ目編み)、織り編み(*wicker-work*)なども網代編みに包括されるのである。いずれも根本的な構造に違いはないため、本稿でも考古学用語としての広義の網代編みを用いることにした。
- 4) 超え・潜り・送りの数値は、90°回転させると逆転したり変わったりするが、原則として、超えの数値が潜りよりも多くなる方を緯条とすることにした。ただし、円柱状の材と扁平で太い材を組み合わせる場合については、円柱状の方を経条とし、扁平で太い材を緯条とすることにした。また、送りの方向(左右)については無視し、送りの数はより少ない方で表すことにした。
- 5) 各条が複数本1組にするものについては、いくつかの種類が認められるが、「 $\times x$ 」として一括することにした。これらを別種として扱う場合は、 $x$ の中に単位となる条の本数を入れればよい(中国の網代編み分類の数値に相当)。経条・緯条の単位本数が異なる場合は、「 $\times x$  (経or緯)」と表すか、「 $\times x/y$ 」と表せばよいであろう。
- 6) 2本超え1本潜り1本送りの敷物を裏返しに敷いた場合、超えと潜りが逆転し1本超え2本潜り1本送りになる。つまり圧痕としては別種のように見えても、両者の原体は同じであり一括することにした。3本超え2本潜り2本送りと2本超え3本潜り2本送り、4本超え2本潜り3本送りと2本超え4本潜り3本送りについても同様である。
- 7) 一部に模様のような箇所があっても、主体が単純な網代編みとなる場合は、模様編みとしては扱わず、超え・潜り・送りによる分類を優先すべきである。

- 8) 図4に示した素材は、あくまでも代表的なものである。 $d^2$ 類・ $e^2$ 類に分類できる草材をはじめ、実際はかなり多くの種類が存在する。また、圧痕は押圧された編み物の一方の面しか反映しないため、丸みを帯びた材は断面形(円形・半円形など)を問わず $c$ 類ないし $d$ 類に一括せざるを得なかったことを注意されたい。
- 9) ここでいう「太い」・「細い」というのは、先行研究や各報告を参考にした上で、およそ3mmを目安に分けている。中には太い材と細い材が混在する可能性があるが、平均的な太さを基準として、いずれか一方に分類した。
- 10) 今後細分が必要になった場合は、例えばスタグレ状のものを「B-1a類」、ムシロ状のものを「B-1b類」という形に分けることも考えられる。
- 11) 中国新石器時代・仰韶文化期以降で「布紋」と報告されているものについては、編布圧痕であることが確実に分かる陝西省西安市・半坡遺跡(中国科学院考古研究所ほか1963)の「絞纏法(*twined*)」を除き、基本的に織物圧痕として捉えている。大汶口文化・竜山文化の「布紋」が全て平織の圧痕であることは間違いがないが、仰韶文化の遺跡で報告に図や写真のない「布紋」の中には、一部編布圧痕を含んでいる可能性がある。また、筆者が畝織状の織物圧痕と判断したもの、尾関氏のいう「細密編布」(尾関1996)を含む編布圧痕である可能性が捨てきれない。
- 12) 半坡遺跡で「纏結(*twilled and wrapped*)編織法」と報告されたものであるが、おそらくトウなどを楕円形に巻き上げた編み物の一部であると思われる。
- 13) 別稿(松永2003)において仮にE類としたものである。この種の圧痕については原体が不明であるため、あえて特定の名称をつけていない。
- 14) 日本では、縄文時代早期を初現とし、中期から後期をピークとしてほぼ全国的に見られる。また中国では、新石器時代前期を初現とし、中期から後期にかけて、華北地方以北を中心に分布が確認できる(後期には華南地方でも稀に見られる)。
- 15) 中国新石器時代の資料に関しては、今回の試案とは若干異なる分類に基づいているものの、すでに発表済みである(松永2003)。

## 参考文献

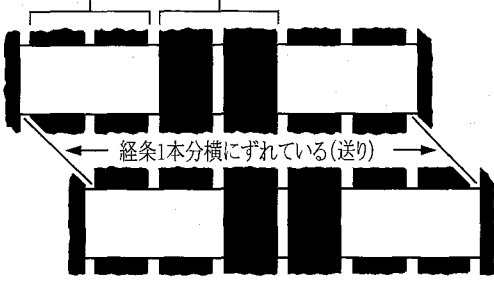
### 日本語

- 青森県教育委員会 1975 『むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報—昭和49年度—』(大石平遺跡)
- 秋田かな子 1990 「土器底部の輪積み技法—底面の圧痕の観察より—」『東海大学校地内遺跡調査団報告1』pp.150~165
- 穴水町教育委員会 1980 『曾福遺跡』
- 安孫子昭二 1971 『平尾遺跡調査報告I』平尾遺跡調査会
- 荒木ヨシ 1968 「縄文式時代の網代編み」『物質文化』No.12 pp.20~26
- 荒木ヨシ 1970 「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』No.15 pp.12~18
- 荒木ヨシ 1971 「縄文式時代の網代編み(第3報・完結)」『物質文化』17 pp.29~40
- 荒木ヨシ 1995 「縄文時代に於ける分業の一考察」『物質文化』No.58 pp.1~19
- 伊東信雄 1966 「縄文時代の布」『文化』第30巻 第1号 東北大学文学部 pp.1~20
- 印東道子 1975 「木葉底の有する意味について」『考古学ジャーナル』113 ニュー・サイエンス社 pp.19~22
- 植松なおみ 1980 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』No.35 pp.20~35
- 植松なおみ 1981 「東北型網代圧痕について」『古代文化』第33巻 第2号 pp.17~26
- 浦幌町教育委員会 1968 『平和遺跡』

- 浦嶋町教育委員会 1976 『共栄B遺跡』  
大脇直泰 1961 「押圧土器について」 『古代学』 第9巻 pp.132~141  
大鰐町教育委員会 1986 『上牡丹森』  
小笠原好彦 1970 「縄文・弥生式時代の布」 『考古学研究』 第17巻 第3号  
考古学研究会 pp.29~49  
小笠原好彦 1983 「編物・布」 『縄文文化の研究』 第7巻 雄山閣 pp.293  
~304  
岡元満子 1986 「底部に圧痕を有する縄文式土器について」 『鹿大考古』  
5 pp.91~125  
尾関清子 1996 『縄文の衣』 学生社  
鏡山猛 1972 「原生期の織布」 『九州考古学論叢』 吉川弘文館 pp.413~485  
金田一精 1998 「付編 底部に鯨の椎骨の圧痕が残る阿高式系土器」 『黒  
橋貝塚』 熊本県教育委員会 pp.146~149  
川端敦子 1983 「底部圧痕に関する基礎的報告」 『北陸の考古学』 pp.219  
~232  
後藤秀彦 1982 「平底土器」 『縄文文化の研究』 第3巻 雄山閣 pp.74~84  
小林行雄 1964 「編物」 『続古代の技術』 塙書房 pp.101~186  
埼玉県教育委員会 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総  
括編—』  
(財) 古代学協会 1991 『茨城県福田(神明前) 貝塚』  
(財) 岐阜県文化財保護センター 1993 『荒城神社遺跡』  
(財) 千葉県文化財センター 1976 『千葉市中野僧御堂遺跡』  
佐賀県立博物館 1975 『坂の下遺跡の研究』  
篠原浩憲 2001 「縄文時代における底部圧痕について—予察と栃木県下の  
概要—」 『研究紀要』 第9号 (財) とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化  
財センター pp.77~94  
末吉町教育委員会 1981 『宮之迫遺跡』  
杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸概説』 工芸美術研究会  
杉山寿栄男 1942 『日本原始織維工芸史』 原始篇・土俗篇 雄山閣  
仙台市教育委員会 1981 『六反田遺跡発掘調査報告書』  
坪井正五郎 1893 「西ヶ原貝塚探求報告 其四」 『東京人類学会雑誌』 第  
93号 pp.109~119  
坪井正五郎 1899 「日本石器時代の網代形編み物」 『東京人類学会雑誌』  
第161号 pp.440~444  
東亜考古学会 1938 『赤峰紅山後』  
東京都埋蔵文化財センター 1993 『多摩ニュータウン遺跡—平成3年度—』  
(多摩ニュータウンNo.471遺跡)  
長沢宏昌 1986 「縄文時代前期末~中期初頭の土器底部にみられる編物痕  
について」 『研究紀要』 3 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財セ  
ンター pp.1~14  
長沢宏昌 1988 「山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について」 『研究紀要』  
4 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター pp.1~26  
名久井文明 1998 「縄文時代から継続する編組技術」 『縄文式生活構造』  
同成社 pp.24~61  
新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974 『吉野屋遺跡』  
西村正衛 1975 「千葉県成田市荒海貝塚(第二次調査)」 『学術研究—地  
理学・歴史学・社会科学編—』 第24号 早稲田大学教育学部 pp.1~25  
野々市町教育委員会 1983 『野々市町御経塚遺跡』  
平口哲夫 2003 「日本沿岸の先史捕鯨文化」 『考古学的研究法から見た  
木の文化・骨の文化』 クバプロ pp.131~152  
藤本英夫 1956 「底面にホッキ貝紋のある土器」 『先史時代』 3 p.19  
松永篤知 2003 「中国新石器時代の「敷物圧痕」について」 『中国考古学』  
第3号 pp.22~45  
三島格 1961 「鯨の脊椎骨を利用せる土器製作台について」 『古代学』 第  
10巻 第1号 pp.66~73  
モース(モーリス) J.S.(矢田部良吉訳) 1879 『大森介塚古物編』 理科  
会粹 第一帙 東京大学法理文学部  
山本直人 1989 「石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類」 『北陸の考古  
学II』 pp.39~60  
渡辺誠 1976 「スダレ状圧痕の研究」 『物質文化』 No.26 pp.1~23  
渡辺誠 1985 「編布の研究」 『日本史の黎明』 八幡一郎先生頌寿記念考古  
学論集 六興出版 pp.169~207  
渡辺誠 1991 「組織痕土器研究の諸問題」 『交流の考古学』 肥後考古学会  
pp.215~232  
渡辺誠 1992 「編布の変遷」 『衣生活と民具』 日本民具学会論集6 雄山閣  
pp.7~23  
渡辺誠 1995 「中国新石器時代における編布圧痕の研究」 『名古屋大学文  
学部研究論集』 122 (史学41) pp.71~81  
渡辺誠 1996 「マタタビ製のカゴ類」 『名古屋大学古川総合研究資料館報  
告』 No.12 pp.83~92  
中国語  
河南省文物研究所・長江流域規畫辦公室考古隊河南分隊 1989 『浙川下王  
崗』 文物出版社  
邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班 1977 「河北磁山新石器遺  
址試掘」 『考古』 1977年第6期 pp.361~372  
国家文物局考古領隊培訓班 1990 『兗州西呉寺』 文物出版社  
固原県文管所・中国歴史博物館考古部 1993 「寧夏固原県紅圈子新石器時  
代墓地調査簡報」 『考古』 1993年第2期 pp.103~116  
深圳市博物館・中山大學人類学系 1990 「深圳市大鵬鵬頭嶺沙丘遺址発掘  
簡報」 『文物』 1990年第11期 pp.1~11  
中国科学院考古研究所 1959 『廟底溝与三里橋』 科学出版社  
中国科学院考古研究所・西安半坡博物館 1963 『西安半坡』 文物出版社  
中国社会科学院考古研究所安陽隊 1988 「安陽鮑家堂仰韶文化遺址」 『考  
古学報』 1988年第2期 pp.169~188  
中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1982 「赤峰西水泉紅山文化遺  
址」 『考古学報』 1982年第2期 pp.183~198  
中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕県博物館 1984 「山東滕県北  
辛遺址発掘報告」 『考古学報』 1984年第2期 pp.159~191  
巴林右旗博物館 1987 「内蒙古巴林右旗那斯台遺址調査」 『考古』 1987年  
第6期 pp.507~518

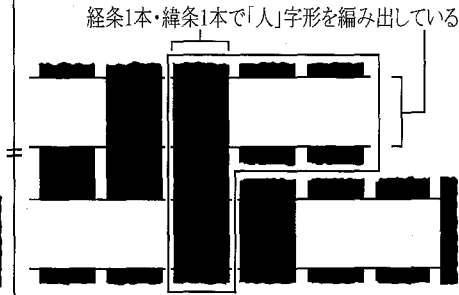


経条2本分超え、経条2本分潜っている  
(超え) (潜り)



1. 日本分類法(2本超え2本潜り1本送り)

経条1本・緯条1本で「人」字形を編み出している



2. 中国分類法(1経1緯人字紋)

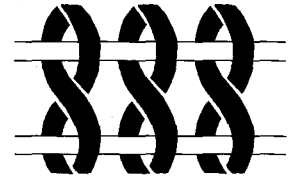


図2 もじり編みの基本組織

図1 日本・中国の網代編み分類法 (松永 2003)

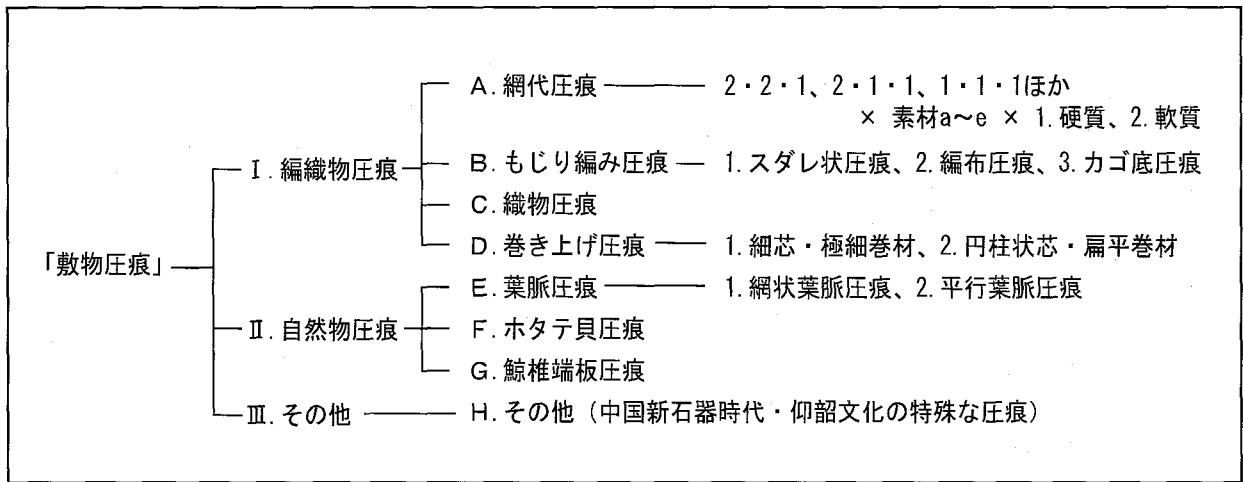
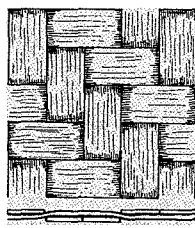
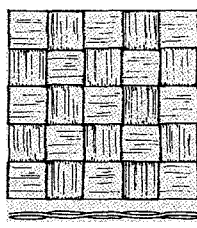


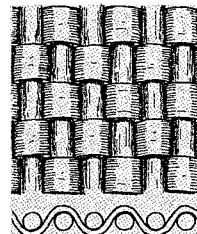
図3 東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類概念



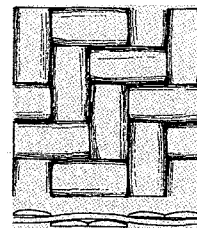
A-2・2・1a<sup>1</sup>類  
(樹皮材・竹材)



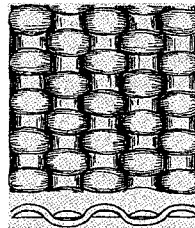
A-1・1・1a<sup>2</sup>類  
(草材)



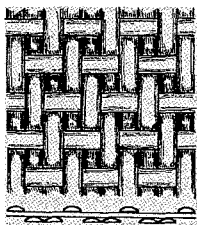
A-1・1・1b<sup>2</sup>類  
(蔓材・草材)



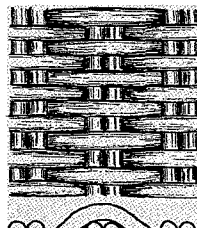
A-2・2・1c<sup>1</sup>類  
(竹材)



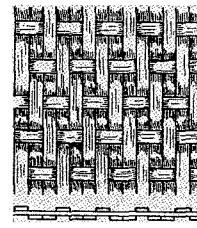
A-1・1・1c<sup>2</sup>類  
(蔓材)



A-2・1・1d<sup>1</sup>類  
(竹材)



A-1・1・1× d<sup>2</sup>類  
(蔓材)



A-2・1・1e<sup>1</sup>類  
(竹材)

0 2.5 5 10mm

(縮尺はあくまで目安)

図4 網代圧痕から推測される主な素材原体

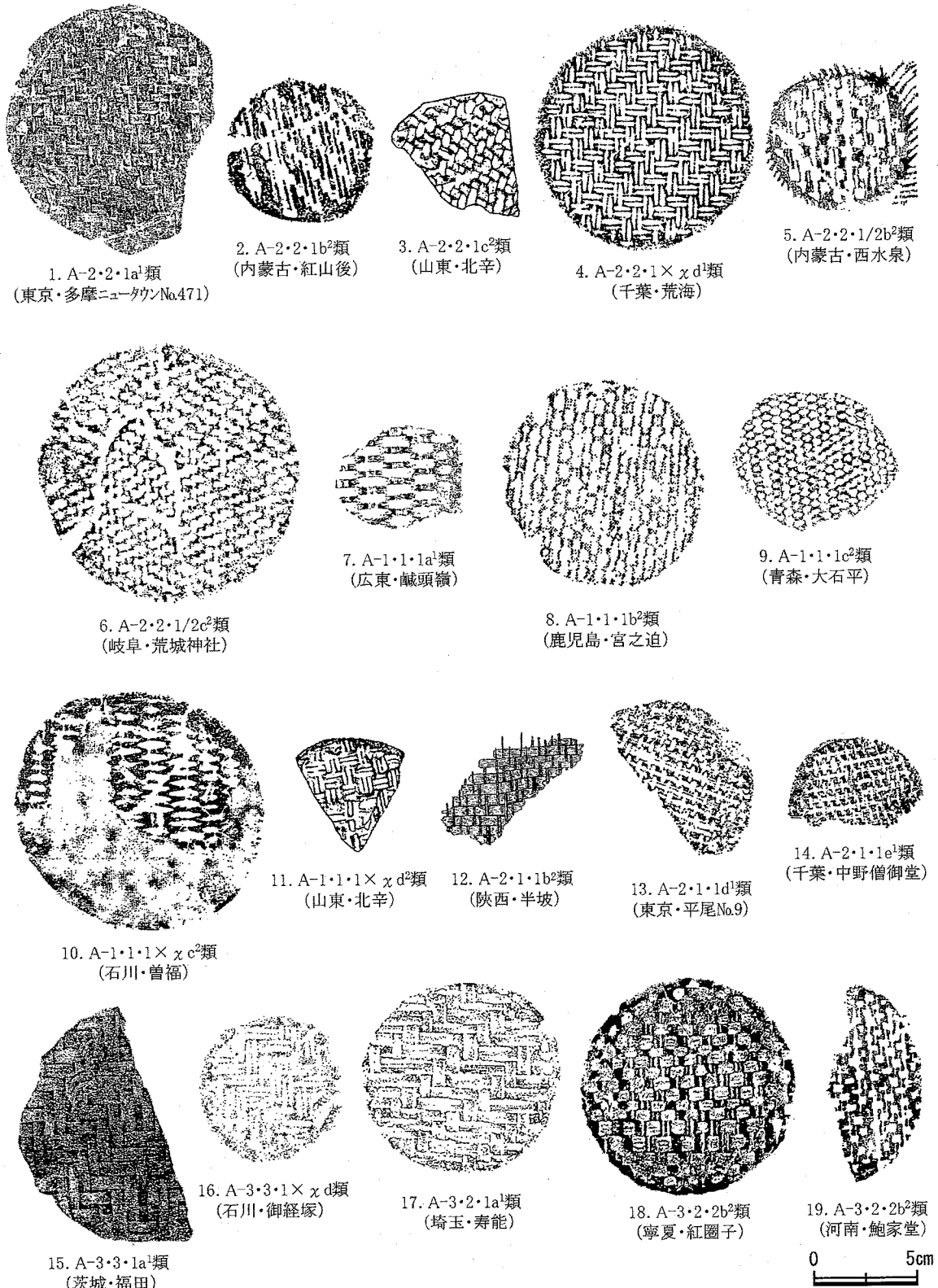


図5 東アジア先史土器の「敷物圧痕」1  
(拓影・図は各報告より転載)

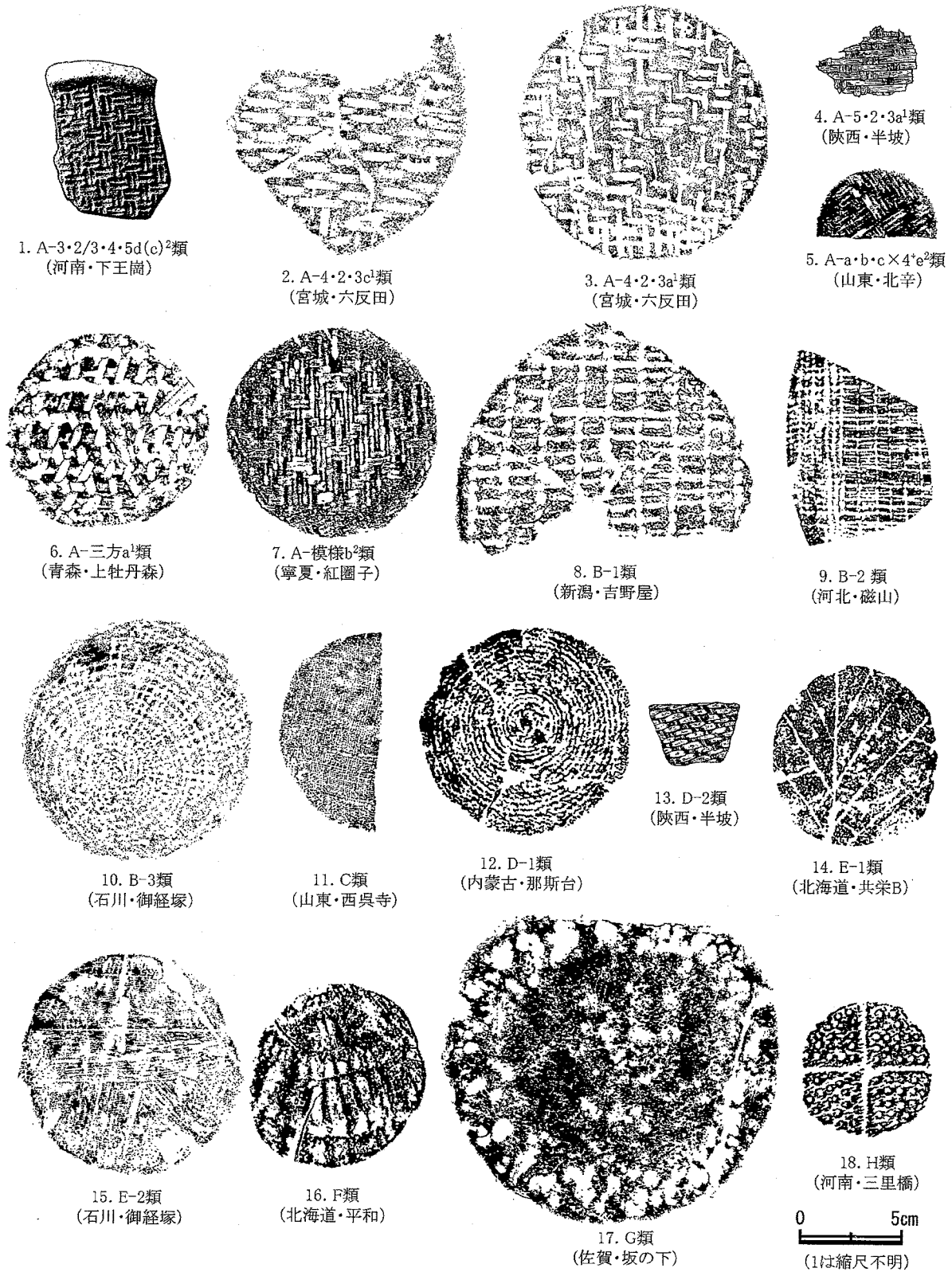


図6 東アジア先史土器の「敷物圧痕」2  
(拓影・図・写真は各報告より転載)